北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1993. 4. 15

第15巻1号

通巻125号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

人文学部開設記念号

アマーストの二人の死

高久眞一

1886年のこと、マサチュセッツ州の西部の小さな町アマーストで二人の人が相前後して全く無名のままにひっそりと世を去った。一人は男性で享年59歳、他は女性で55歳。

「無名のまま」というのは、当時のことであって、現在その女性は余りにも有名、日本でも結構知られている閨秀詩人エミリ・ディキンスンその人であり、他の一人は日本では誰一人知らぬ人とてないというのに、アメリカでは依然として無名のまま。他でもない、ウイリアム・エス・クラーク、札幌農学校の生みの親だ。

エミリ・ディキンスンの詩人としての緊迫した活動は外からは全く分からなかった。時代が淀み、濁って彼女の詩がよく見えなかったのだ。ロマン主義の残照の中にぬくぬくとして、ロングフェローを当代最高の詩人と仰いでいた時代であった。その時代風潮への痛烈な批判ともなっている彼女の千を越える詩は、彼女の生前、ほんの数篇をのぞいてついに活字になることはなかった。時代が彼女の口を封じたのだ。彼女は自分の家屋敷から一歩も外へ出なくなり、溢れる思いを結晶化し、それを小さな紙切れに書いては封筒や抽出しにしまいこんでしまった。町の人からは奇人とか狂人と取り沙汰され、やがてその存在すら忘れられていたのだから、彼女の死の時には町の中では音ひとつしなかった。

クラークはディキンスンとは凡そ対照的な生涯を辿った。極めて外向的な人で、手紙が二十篇ばかり残されているだけで、メモ帳も日記も全くなく、彼の内奥の歩みなどは知るよしもない。アマースト大学卒業後のドイツへの留学と博士号取得、母校での教授、南北戦争への挺身、大佐への昇進、終戦後はマサチュセッツ農科大学のアマーストへの誘致運動とその学長就任、そして日本政府からの招聘といった目くるめくばかりの経歴であった。しかし、日本からの帰国後は株の売買や鉱山経営に転じ、やがて事業に失敗し、莫大な借財をかかえ、アマースト町民に多大の金銭的損害を与え、かつての名誉は泥まみれになってしまう。町の人々からは死ぬ前から葬り去られてしまっていたのだ。したがって、彼の死は文字通りの意味で「無名のまま」であった。

19世紀後半の事実上の「詩聖」ロングフェローの詩に「人生讃歌」という説教調の強い詩があり、大いに愛唱されたものだが、その中で外的活動、勇気、積極性、信仰に基づいた倫理性といったものが高らかに謳いあげられている。ディキンスンは最後の徳目以外のすべての点で失敗者とされ、他方、クラークは最後の徳目の喪失のゆえに烙印を押され、人々の意識から追放された。あらゆる点で正反対の生涯を送った後で同郷で同年に迎えた無名の死という共通項を持つ二人は、当時のアメリカの風潮と、その後の時代の推移とを余すところなく伝えていて興味が尽きない。

（たかく　しんいち　人文学部教授）

「大学の未来へ」（ロソフスキー教授著）などを読んで感じたこと

寺　田　米　男

最近、わが国の大学の危機と改革を叫ぶ声が日増しに大きくなっている。大学就学年齢の18歳人口が、1990年　201万人、1994年　186万人、2000年　151万人となり、1994年に比し2000年は81.2%と予想される。現に、早稲田、慶応は本年大幅な志願者の減をみている。正に、大学在続のサバイバルの時代に入った。大学の評価に関し、わが国のメーカーのトップの人はこうも言っている。「企業は大学の研究になんら期待していない。学生をくれればいい。その学生も会社で再教育しなければ使い物にならないが……」。もう一つ。わが国のトップクラスの高校生が入り、多くの大学がモデルとして目標にしている東大の世界的評価が「パリ大学1位、トウダイ67位」――米カリフォルニア州立大学教授が「独断」と断りながら選んだアメリカを除く世界の大学ランキング……」。アメリカの大学のトップクラス（世界の⅔以上）を加えれば東大は100位以下？　の評価である。大学に職を得ているものとしてはただ事ではない。私が最近読んだ図書（1992年～現在）を通して考えてみたい。そのなかの図書名は「大学を問う」（産経新聞社会部編）、「日本の論題」（文芸春秋社）、ロソフスキー教授：「大学の未来へ」、吉村作治：「それでも君は大学へ行くのか」。まづ、世界最優良大学のハーバァード大学　文理学院元学長のロソフスキー教授によれば、アメリカには現在約3000の大学があり、単独カレッジ（教授は基礎的教養学の一流の解説者であるが、研究は全然しないか、少ししかしない）と上位の研究綜合ユニバシティー（教授は週に6～12時間教室に出ればよく、あとの20時間以上は研究に従事）があって大多数の大学はその中間に位する。彼の理念は「教授の質こそ、大学の基本」で一貫しており、これによって、最良の教授は最優秀の学生をひきつけ、最高の卒業生を産み、最大の研究補助をうけることができるとしている。社会に対しては「我々は大変な競争市場にあって、我々のサービスを求める人たちにとって、魅力的な存在であることによってのみ生き残る」。教授の質については、終身在職権のある教授か否かが審査される。平均8年の契約期間の後に行われ、対象は助教授か、講師で年齢30歳台、全員PhD、この制度は「上か、さもなくば外」でハーバァード大学では「これほど厳正かつ客観的な基準で人を探す私的な企

A・Vブース設置のご案内

昨秋より3階北側に3台3席のA・Vブースが新設されました。開設以来利用者も多く、学生に憩いの場を提供しているような趣もありますが、明るく親しみやすいA・Vコーナーをモットーに、これからもソフトの充実にも努めていきたいと思っております。気軽にご利用下さい。

尚、A・Vブースの利用方法etc.につきましては、2階カウンターにてお聞き下さい。

3階　AVコーナー

業、職業がない」と云われるほど厳しく、文理学院では約80%が外へ追い出され、最も適わしい教授は世界中から探され、適任者がいなければ空席のままとする。終身在職教授の平均年齢は55歳。これに対して日本はどうか。日本の大学では「競争原理」や「チェック機能」が働くのは僅かで、講師などに採用されると、順次、助教授、教授に昇格し、定年まで身分は保証される。大学の教員数(教授から助手まで)は約14万人、弁護士の10倍、医者より5万人少い程度、技術士(医学を除く科学技術の殆どの分野)の約5倍、これほど教員が多くては質が下るのが予想される。この一方に教える大学生の重要な問題がある。吉村作治:「それでも君は大学へ行くのか」の最初の書出し部分、「講義中の不可思議な行動」は当世の早大生の教室内での私語、雑言、勝手に教室に出入りする風景を述べたものであるが、私の講義中でも似たような光景が起ることもあるので読み返して読んだ。諸悪の根源として私がつけ加えたいのは誤った「画一主義」と「平等主義」である。これは現在の日本のあらゆる分野に浸透して容易に改善できない状態になっている。所謂「金太郎飴」的な人間と社会を作り出す仕組みである。風景に譬えれば「のっぺらとした山も谷も川も緑もないつまらない風景」を日本人は作っているようなもので、昨今の経済不況の大きな原因の一つに産業の横並びと「金太郎飴」的な構造が指摘されている。ロソフスキー教授は「現在の日本の大学教育制度は、21世紀において世界のリーダーたる日本の役割に相応しいものでしょうか」とその不安を指摘している。教育に関する諸制度を作ったのは我々大人である。学生に向かって云々する前に大人に責任があることを自覚すべきである。ただし、学生諸君にはっきり云っておきたい。「君達は学生時代に成人の20歳に達する。大人として自覚し、自立し、知識だけに偏ることなく、創造性、判断力、実行力、忍耐力を蓄えてほしい。教師はその経験に照らして君達を助けることができる。

(てらだ　よねお　工学部教授)

主なテープのリスト

IN AMERICA.	1-10	インターナショナル・ホライゾンス
米国のPL陪審裁判		日本火災海上
BUNSHUN TRAVEL.	1-29	文芸春秋
THE CHARLIE BROWN & SNOOPY SHOW etc.	12 vols	C.M.SCHULZ
地球の歩き方	1- 4	ダイヤモンド社
語聴解力演習	4 vols	放送大学
FACES OF JAPAN.	1-23	INTERVOICE
ファイン・スキーテキスト	1- 3	平沢文雄
北の国から'92巣立ち	前・後編	フジテレビ
国会百年		衆・参議院企画
教師教育ビデオ教材	3 vols	放送大学
リンガホーンビデオ英会話	3 vols	リンガ
マイロボットへの展開		放送大学
20世紀　世界の記録—映像でつづる	1-10	文芸春秋
思い出の青函連絡船		JR北海道
さらば海峡の友よ		JR北海道
SESAME STREET HOME VIDEO.	1-10	CBSソニー
THE SONGS OF MOTHER GOOSE.	2- 3	谷川　俊太郎

新着図書 ——人文学部

大いなる野望　わが全米メディア制覇への道　アル・ニューハース著　1991

気がついた時には、火のついたベッドに寝ていた　ロバート・フルガム著　1991

オプティミストはなぜ成功するか　マーティン・セリグマン著　1991

しごとが面白くなるシェイクスピア　人間観察力のつけ方　横沢彪著　1988

天皇制とキリスト者　飯沼二郎著　1991

異境の使徒　英人ジョン・バチラー伝　仁多見巌著　1991

古人骨は語る　骨考古学ことはじめ　片山一道著　1990

蘇るパレスチナ　語りはじめた難民たちの証言　藤田進著　1989

即位の礼と大嘗祭　資料集　神宮文庫編　1990

留学生のための日本史　東京外国語大学留学生教育教材開発センター編　1990

四天王寺　中村浩、南谷恵敬著　1991

王朝絵巻　貴族の世界　毎日新聞社　1990

合戦絵巻　武士の世界　毎日新聞社　1990

江戸っ子の生活　芳賀登著　1990

ベトナム戦争　新聞集成　上・下　大空社　1990

ケネディ家の人びと　上・下　ピーター・コリヤー、デヴィット・ホロウィッツ著　1990

ロス・ペロー　合衆国大統領に挑んだ男　ケン・グロス著　1992

二つの黒人帝国　アフリカ側から眺めた「分割期」　岡倉登志著　1987

老いと看取りの社会史　新村拓著　1991

イギリス社会経済史地図　1700年から現代まで　レックス・ポウプ編　1991

紀行を旅する　加藤秀俊著　1984

雑学北海道自然の旅　本多貢著　1991

武四郎のタルマイ越え　地蔵慶護著　1991

モースの見た北海道　鵜沼わか編著　1991

妻と私のヨーロッパ　加藤　三重喜著　1991

アメリカハンディ辞典　大下尚一［ほか］編　1989

貴恵のニューイングランド物語　信号三つの町に暮らして　中井貴恵著　1990

カリフォルニアワインの旅物語　井上宗和著　1991

イギリス人の日本人観　70人のイギリス人とのインタビュー　キャスリーン・マクロン著　1990

コースチャから北方領土へ　ひらかれるソビエト極東と北海道　NHK札幌放送局日ソプロジェクト編・著　1991

アメリカン・スタイン　ボブ・グリーン著　1991

アメリカとは何か100章　興亡の岐路に立つこの超大国を日本人はどう理解すべきか　大森実著　1989

アメリカの分裂　多元文化社会についての所見　アーサー・シュレージンガー、Jr著　1992

大人の国イギリスと子どもの国日本　マークス寿子著　1992

ワシントン・ロビー　日米経済外交陰の主役　鈴木康彦著　1990

住んでみたニューヨーク　ワールド・キャピタルの躍動　谷沢慎一郎著　1991

海外交流史事典　富田仁編　1989

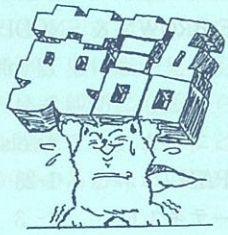
誤解　日米欧摩擦の解剖学　エンディミヨン・ウィルキンソン著　1992

気楽に読もう——①

『英語話題事典』
大庭勝・村石利夫編著（ぎょうせい）

「あなたの心のポケットにアメリカやその他の英語圏の人たちの生活、暮らし、文化、そして物の考え方など、キラリと光る楽しい話題をいっぱい詰め込んでみて下さい。あなたのハートはもう、英語の宝庫!?」（刊行の言葉より）刊行の言葉がこんなに面白そうなんだから中身はさぞやと、期待に胸が膨らんできませんか？私もそう思って読みはじめた一人です。そう、事典とはいってもこれは読み物です。ヘエー・そうなんだ・フーン・と感心しながら、驚きながら、アッというまにあなたのハートは英語の宝庫ですぞ！なーんてね。

(M)



2階閲覧室入口とカウンター

人文学部 —— 新着図書

日米「新冷戦」「最悪のシナリオ」は避けられるか 花井等著 1992

父娘で語る日米問題 若者にできること大人がするべきこと 加藤幸次、加藤美和著 1992

アメリカの言い分日本の言い訳 佐藤隆三著 1991

日米同盟に未来はあるか ジョン・K.エマソン、ハリソン・M.ホランド著 1991

日本の選択 国際国家への道 植松忠博著 1990

対日経済封鎖 日本を追いつめた12年 池田美智子著 1992

日米経済摩擦と政策協調 揺らぐ国家主権 坂井昭夫著 1991

日系アメリカ人の日本観 多文化社会ハワイから 高木真理子著 1992

訴えられる在米日本企業 雇用差別という陥穽 岸永三著 1992

ウォール街から東京市場を読む 大竹慎一著 1991

日米欧の金融革新 諫山正、春田素夫編 1992

ポスト・バブル期の金融変革 斎藤健著 1992

フミさんのたからもの どさんこおばさん（ニッセイレディ）が日本一になった 広瀬誠著 1991

語りあう身体 ジョン・オニール［著］ 1992

アメリカ人のホンネ 仕事・カネ・暴力・セックスetc. 全米調査レポート J.パターソン、P.キム著 1992

生活文化論 佐藤方彦編著 1992

世界の子どもたち 比較子ども学 加藤秀俊編 1984

「勉強」時代の幕あけ 子どもと教師の近世史 江森一郎著 1990

挑戦！ハーバードAMP留学 藤井義彦著 1991

学歴産業 学位の信用をいかに守るか D.W.スチュワート、H.A.スピル著 1990

かしこいアメリカ留学 親子・教師のためのカレッジブック こんなマニュアルほしかった 石川洋一著 1991

概説生涯学習 辻功［ほか］編著 1991

アメリカの伝統文化 野外博物館ガイド 杉本尚次著 1992

イオマンテの考古学 宇田川洋著 1989

ハワイの波は南極から 海の波の不思議 永田豊著 1990

見えない病 自閉症者と家族の記録 チャールズ・ハート著 1992

健康と安全が危ない恐るべき輸入食品 港湾労働組合、港湾関係物流実態調査研究会著 1986

西欧のアメニティ・ストリート 写真で見る魅力あるまちづくり 山口貴久男著 1989

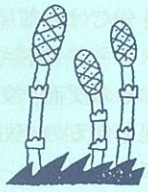
ブランドを創る 商標・サービスマーク育成の精神 森孝之著 1992

気楽に読もう —— ②

『離婚する女たち』

我孫子晴美著（亜璃西社）

北海道は離婚が多いと言う。その理由は、内地の招待制結婚式に比べ、北海道の会費制は費用の面で格安である事とか、血縁や地縁による束縛が北海道にはない為、本人同志の意志だけで簡単に離婚をしてしまう為だとか、北の女性が強くたくましいからだとか…。成田離婚、バツイチなどの言葉が出回っている御時世。離婚者は決して、暗くないのだ。離婚後、事業を始め社長になったお母さん、勤めの経験も、手に職もなかった女性が勉強をし、インテリア・コーディネイターになった話、二度の離婚経験を持ちススキノで働く女性など、離婚をした彼女らの考えや生活、仕事、恋愛、再婚など十人十色の生き方を書いた本です。(著者は札幌在住)まだ結婚していないあなたもぜひ、読んでみて下さい。だれも離婚しようとして結婚するわけではないのだから…。（S）



新着図書 ――法学部

遅れてきた国民　ドイツ・ナショナリズムの精神史　H.プレスナー［著］　1991

開国の死者―ハリスとヒューストン―　宮永孝著　1986

太平洋戦争の起源　入江昭著　1991

北九州市成立過程の研究―合併論・合併運動を中心として―　徳本正彦著　1991

義和団戦争と明治国家　小林一美著　1986

ネズミはまだ生きている―チェンバレンの伝記―　楠家重敏著　1986

コミンテルンの世界像　世界政党の政治学的研究　加藤哲郎著　1991

ナチ党の思想と運動　中村幹雄著　1990

政治選択の科学　N.フローリック、J.A.オッペンハイマー〔著〕　1991

民主主義の政治学　山本佐門著　1992

ヒトラーの世界観　支配の構想　エバーハルト・イエッケル著　1991

資料日本社会党四十年史　日本社会党結党四十周年記念出版刊行委員会編　1986

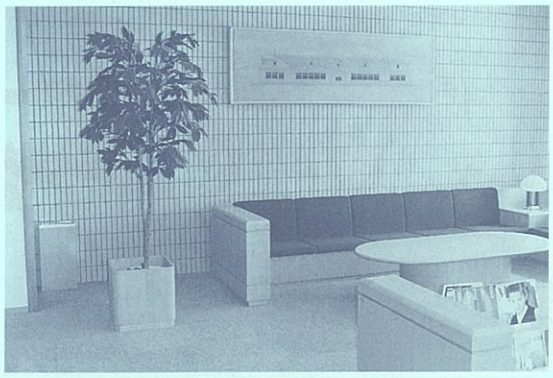
公務員制の研究　辻清明著　1991

法における因果性　H.L.A.ハート　T.オノレ著　1991

現代ソ連外交史・続―東西関係・交渉史―　小田切利馬著　1991

法律用語対訳集　中国語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1991

法律用語対訳集　ドイツ語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1992



2階閲覧室

法律用語対訳集　英語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1990

法律用語対訳集　フィリピン（タガログ）語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1992

法律用語対訳集　スペイン語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1991

法律用語対訳集　韓国語編　法務省刑事局外国法令研究会編　1991

欧米ビジネスロー最前線―国際法務マンになれる本―　東京リーガルマインド編　1991

社会主義法の変容と分岐　社会主義法研究会編　1992

法をめぐる人と思想　八木鉄男、深田三徳編著　1991

エクイテイ　F.W.メルトランド著　1991

純粋法学と憲法理論　新正幸著　1992

明解不動産用語辞典　遠藤浩　田中啓一編　1991

子ども・家庭・憲法　米沢広一著　1992

転換期の家族法　島津一郎著　1991

遺言・公証　倉田卓次著　1992

気楽に読もう――③

『まるごと自炊ブック』

小山律子著（金園社）

それぞれが新しい一歩を踏み出す4月。親元を離れたり、下宿を出てアパートやマンションに移って、独り暮らしを始める人も多い季節です。自分だけの部屋を持って、これからの生活にワクワク・ドキドキ胸が高鳴っている事でしょう。でもその反面、気になるのが三度の食事ですね。料理を作るのが好きな人はいいとしても、今まで親に作ってもらって包丁を持った事がないとか、面倒くさいから作りたくないなんていう人は大変です。三食共外食で済まそう、コンビニで買って済まそうと思っている人も多いのではないでしょうか？確かに今の世の中、料理なんて作らなくたっていくらでも食物はあふれています。でもそんな物ばかり食べていて体にいいはずはありません。私達は、生きる為に食事を取ります。食事は生命の源であり基本なのです。そんな大事な食事だか

経済学部 —— 新着図書

リースの会計処理と税務　太田昭和監査法人編　1991
金利・為替・株価の政治経済学　植草一秀著　1992
保険の社会学—医療・くらし・原発・戦争—　本間照光著　1992
財政読本　野口悠紀雄編　第4版　1990
地方財政論　齊藤慎［ほか］著　1991
レーニン全集　1—45、別巻1、2、［付録］　V.I.レーニン著　1953—1991
ビジネスソフトを使うためのMS—DOS早わかり　ダイナブック・98ノート対応版　斉藤孝著　1991
ミッシェル・フーコー伝　D.エリボン著　1991
アメリカの岩倉使節団　宮永孝著　1992
朝鮮半島で起きたこと起きること—断絶・共存・統一の歴史と行方—　神谷不二著　1991
収奪された大地—ラテンアメリカ五百年—　E.ガレアーノ著　1991
天皇崩壊—岐路に立つ日本—　T.クランプ著　1991
終わりなき走路(レース)—本田宗一郎の人生—　池田政次轄編著　1991
社会科学方法論序説—M.ウェーバーとF.v.ゴットル—　加藤昭彦著　1991
日本の孤独—誇りのある国家であるために—　西尾幹二著　1991
日本社会運動史料　機関紙誌篇　法政大学大原社会問題研究所編　1992
国際情勢の基調を読む—ポスト米ソ二極時代の新世界秩序とは—　中西輝政著　1991
湾岸戦争　T.B.アレン［ほか］著　1991
アメリカのパレスチナ人　土井敏邦著　1991
「二つの衝撃」と日本—「勝者なき平和」の「新世界秩序」を求めて—　伊藤憲一著　1991
ゼミナール会社法入門　岸田雅雄著　1991
株主の権利—法的地位の総合分析—　崎田直次編著　1991
コメコン諸国統計年鑑　1990　コメコン書記局編　1992
市民社会論の構想　高島善哉著　山田秀雄編　1991
資本主義と失業問題—相対的過剰人口論争—　重田澄男著　1990
三井物産の海外情報ファイル—物産マンの海外テレックス—　三井物産広報室編　1992
日本経済史　石井寛治著　第2版　1991
アメリカ経済白書1992—経済セミナー増刊—　日本評論社
OECD経済統計　1960—1990　OECD経済統計局編　1992
豊かな国、貧しい国　本山美彦著　1991
TKC経営指標　平成3年指標版　TKC全国会システム委員会編
現代の企業と社会—企業の社会的責任の今日的展開—　櫻井克彦著　1991
日本のビックビジネス　9　丸山恵也　藤井光男著　1991
対米進出企業視察団報告書—米国・地域社会との融和に努める日本企業　大阪商工会議所国際部編　1990
赤い楯—ロスチャイルドの謎—上・下　広瀬隆著　1991
管理会計論の基調　浅羽二郎著　1991
企業環境の変化と管理会計—CIM構築—　櫻井通晴著　1991
ビジネスおつきあい根ほり葉ほり　NTTメディアスコープ編　1990

気楽に読もう——④

ら、たまには自分で料理を作ってみませんか？今の世の中、女ばかりではなく男だって料理ぐらい作れなくちゃ！気分転換にもなります。少しでも作る気持ちになったら、この本を参考にしてみて下さい。とってもわかりやすいです。Let's Try！

(N)

『男と女の進化論—すべては勘違いから始まった—**』**

武内久美子著（新潮社）

この本は、「女のシワは何故できる?」や「口のうまい男がモテるワケ」等といった内容の話がのっています。進化論とどう関係があるのかといえば、この本の作者は動物行動学者なのです。遺伝子や動物生態学に基づいて堅苦しくなく、そしてユーモアをもって書かれています。本の内容はもちろんのこと、その他カットもとても面白いです。

(T)

新着図書 ——工学部

3階閲覧室

パターン認識　舟久保登著　1991
エキスパートシステム評価マニュアル　寺野隆雄編　1992
一般教養としてのUNIX OSの基礎知識からシステムの応用まで　中原紀著　1991
入門PC－98ワールド　PCテクノロジー株式会社企画部編　1991
Windows 3.0 クイックリファレンス　戸内順一著　1992
MS－DOS　若山芳三郎、小川太三著　1992
パソコン活用ハンドブック　市販ソフトの便利な使い方　吉田総夫編著　1991
クヌース先生のプログラム論　クヌース［著］　1991
C言語によるプログラミング入門　吉村賢治著　1992
家康入国　水江漣子著　1992
騎馬民族の心—モンゴルの草原から—　鯉渕信一著　1992
二つの戦後・ドイツと日本　大岳秀夫著　1992
ヨーロッパ統合　鴨武彦著　1992
基本ゼミナール金融マーケット予測入門　田中泰輔著　1992
日本の若者・アメリカの若者—高校生の意識と行動—　千石保　L.J.デビッツ著　1992
魂にうったえる授業—教えることは学ぶこと—　伊藤功一著　1992
窓の外は海—大学の将来に向けて—　柳井久義著　1991
数学—その形式と機能　ソーンダース・マックレーン原著　1992
逆問題とその解き方　岡本良夫著　1992
行列と行列式　辞書式配列1800問　鶴丸孝司［ほか］共著　1992
パソコンで学ぶやさしい関数グラフィックス　新関章三［ほか］共著　1992
わかりやすいフーリエ解析　久保田一著　1992
（入門）統計解析法　永田靖著　1992
実例クラスター分析　H.C.Romesburg著　1992
統計解析入門　白旗慎吾著　1992
物理実験入門　小田幸康、大石和男共著　1992
角運動量保存則　有馬朗人、大槻義彦著　1991
コンピュータで学ぶ量子力学　数値計算による量子力学基礎編　桜井捷海著　1992
情報の統計力学　篠本滋著　1992
基礎電磁気学演習　高木亀一著　1992
固体の科学　A.ギニエ、R.ジュリアン著　1992
原子と原子核　小川岩雄著　1990
パソコンで見る天体の動き　長沢工、檜山澄子著　1992
ビタミンCの知られざる働き　三羽信比古著　1992
時・人・大林　1892－1991　大林組東京本社広報室編　1991

気楽に読もう——⑤

『食べ物さん、ありがとう』

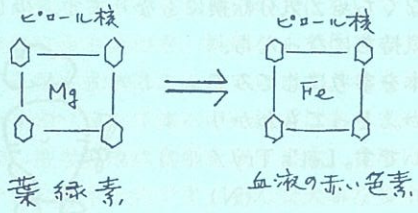
川島四郎・さとうさんぺい著（保育社）

なぜ魚が健康に良いのか？

川島栄養学ではいたって単純明快です。魚は冷たい水の中を泳いでいるので、それよりはるかに体温の高い人間の身体に入っても魚の油は固まらない。牛の体温は39℃、豚は34.5℃。牛肉や豚肉の脂肪は通常36.5℃の人間の身体では固まって血管が詰まりがちになるという訳。

健康にとって一番大切なのは血液が春の小川のようにサラサラと流れていること。その赤い血液を作るのは青い野菜であると川島先生はおっしゃいます。

正反対の色なのに血液と青野菜の葉緑素は化学



教養部 —— 新着図書

現実の脳人工の心　John L.Casti,Anders Karlqvist 編　1991

電脳生物たち　超AIによる文明の乗っ取り　H. モラヴェック著　1991

最新データベース活用事典　データベース研究所著　1990

サイバーテクノロジー　情報時代の技術と社会　月尾嘉男［ほか著］　1990

お茶の間情報局　自宅で使えるデータベース　坂本樹徳、勝田光俊著　1990

新哲学講話　わかりやすい哲学書　渡辺悦太郎著　1991

他者とは誰のことか　自己組織システムの倫理学　大庭健著　1989

新しい時代の幸福論　人生哲学序説　藤川吉美、周暁燕著　1992

異説歴史事典　ゲールハルト・プラウゼ［著］　1991

〈まち〉のイデア　ローマと古代世界の都市の形の人間学　ジョゼフ・リクワート［著］　1991

聞かれて困る外国人の"Why？"　来日外国人をガイドする60のポイント　松本美江著　1991

オーロラからの贈りもの　カナダ人になった私たち　北村恵理著　1987

現代アメリカ社会　コミュニティの経験　D.J. ブアスティン［著］　1990

アメリカン・ドリーム　スタッズ・ターケル著　1990

イギリス自由主義の展開　古い自由主義の連続を中心に　栄田卓弘著　1991

グラムシと現代日本の教育　黒沢惟昭著　1991

新・日本経済論　2000年の世界と日本　関口末夫著　1992

情報化社会の統計学　パソコンによるアプローチ　岩井浩［ほか］編著　1992

社会学の社会学　ピエール・ブルデュー［著］　1991

社会システム論と法の歴史と現在　ルーマン・シンポジウム　1991

シンボリック相互作用論　パースペクティヴと方法　ハーバート・ブルーマー著　1991

イギリス中世都市の研究　酒田利夫著　1991

人間形成と教育　村田鈴子、永井聖二著　1991

再生産　教育・社会・文化　ピエール・ブルデュー、ジャン＝クロード・パスロン［著］　1991

ウレシパモシリへの道　ポン・フチ著　1992

理性よ、さらば　パウル・ファイヤアーベント［著］　1992

ルネサンスの自然観　理性主義と神秘主義の相克　A.G. ディーバス著　1986

自然界における左と右　マーティン・ガードナー著　1992

情報の論理数学入門　ブール代数から述語論理まで　小倉久和、高浜徹行共著　1991

リーマンとアインシュタインの世界　リワノワ著　1991

ひとりで学べる統計学入門　行動科学研究のための道具立て　並木博、渡辺恵子　1992

物理学の七つの革命　古代ギリシアからクォークの発見まで　N. スピールバーグ、B.D. アンダソン［著］　1990

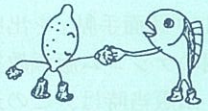
教養の化学　物質と材料の基本　伊沢康司［ほか］編　1990

科学でとらえた宇宙と生命　木下英明著　1990

植物生活環の調節　高橋信孝編　1990

人工現実　インタラクティブ・メディアの展開　M.W. クルーガー著　1991

メモ式中国語早わかり　奥水優著　1992



構造式が良く似ているんですって。

どちらも4個のピロール核があってまん中に鉄が一分子入っているのが血液、マグネシウムが一分子入っているのが葉緑素。体の中に入るとマグネシウムが鉄と入れかわって赤い血色素になるのだそうです。貧血には鉄分をとろうって言うものね。葉緑素はワカメ・ヒジキ等の海藻類、それにお茶の葉っぱにも入っています。たくさん食べてサラサラの血になって、血のめぐりが悪いなんて言われないようにしましょう。

酸っぱいものはお好きですか？

柑橘類や梅干し、酢など酸味の成分はクエン酸です。クエン酸はエネルギー代謝の進行役で、エネルギーになろうかどうしようかとモタモタ迷っているたんぱく質・糖質・脂質などの栄養素を、すみやかに分解し炭酸ガスと水素を放出しエネルギーを発生させます。私はみかん・あんず・もも等大好きで良く食べますが、それでも仕事のクエン酸回路だけは時々ストップしてしまいます。あなたのクエン酸回路は順調でしょうか？　(K)

卒業生から新入生へ

「大学生活とは」

（平成５年３月　経済学部卒業）
高野敦也

平成元年に本学に入学し、４年間の大学生活を経て今年卒業した訳であるが、この４年間を振り返ると様々な想い出を作ってきたことに気付く。長年居た故郷を後にし、１人暮らしを始め、親の仕送りと自分で稼いだお金ですべて賄うつもりであったが、どういう訳か一文無しになり友人からお金を借りた事。急いで大学に行き教室に入ると誰もいなくその日は開校記念日で休みであった事が２回など、その他想い出を語ったら枚挙に遑がない。これらの経験はすべていい想い出として心に焼きついている。

前置きが長くなったが、私の経験も踏まえながら「大学生活とは」と題して筆を進めていきたいと思う。

私の思うところほとんどの人が目的を持たずに入学してくるのではないだろうか。長い受験勉強を経て一段落ついたところで「さて、何をしようか」と考えたとき、一般的に言われる五月病といったボーと生活するという何も考えられない生活を送ってしまう人がいる。それが哀れにも継続すると入学したが大学に来なくなり退学という経過に落ち入る。(中には自分のやりたい事を実現させるために退学するという人もいるが。)現に私の周りでも数名程いた。みなさんがこの事についてどの様な意見を持っているか、大変興味深いが、私個人としては大変いたましく感じる。私自身その様な状況になった事は無いが、あの頃を振り返ってみると入学してすぐに目標を定めることが出来たからではないかと思う。私は子供の頃から教師という職業に憧れ大学に入学した時もその意志は固かった。偶然にも本学には「教育研究会」なるサークルが在り、私自身の大学生活像というものを確立したいがためサークル中心の大学生活を送ることに決めた。私の場合、サークルが自分の目標を目指すにあたっての仲立ちとなったので自分にとってはメリハリのある生活を送ることが出来たのではないかと考える。

ある方に言わせれば「バイトはしないで、学問に打ち込め」となっているが、それはその人の意見でそれを一般論として語ってはいけない。単にその人の理想であり、個人的な意見に過ぎないのだよ、と私は言いたい。今だに勉強イコール学問という不思議な公式をあたりまえと考える人は多いが、社会勉強というものこそ絶えず行わなければならないものではなかろうか。学問ももちろん大切であるが、それに打ち込めというのはどうも疑問を持ってしまう。あまり成績がよくなかったこの私がこの事について真っ向から批判すると説得力に欠けるようである。しかし、現実に両立させる事は本当に大変な事だと思う。両立させればもっと最高だったのかもしれない。しかし私は自分の４年間を最高なものだと自満できる。

特に平成５年度に入学してきた学生諸君。私の考え方には賛否両論を持って試行錯誤しながら頑張ってほしい。それもまた、勉強なり。

平成５年　３月20日

気楽に読もう――⑥

『ナンシー関の顔面手帖』

ナンシー関（文・絵）
（シンコー・ミュージック）

最近では、数々の雑誌に辛口のテレビ批評や社会批判をしてちょいちょい顔を出すナンシー関。先日は、子育ては自己陶酔という〝親バカ論〟を掲載するや多くの女性から酷くお叱りを受けながらも、その独自の重厚なスタイルをアピールしつつある。

もともとは、ケシゴムアートの草分的存在として注目され91年に「顔面手帖」を出版。教育テレビで「ナンシー関のケシゴム版画教室」が放映されたこともある。出版当時は、この道６年のケシゴム職人、作品数は２千を下らないなどと雑誌でも紹介された。彫師ナンシー関が様々な版画材料で挑戦した結果、ステッドラー社のケシゴムが最適とか。大半はカッターで削り細部を彫刻刀で仕上げる。なんともチープな中にも巧みに特徴をとらえた顔面は見事。更に誰が見ても判別のつく顔面の横に、これまた親切にも添えられたコピーがどーんと画面を際立てる。まさにどの顔もちょっと強烈でどこか癖のある味わい深い109の人面お笑い版画集。（S）

税務職員の　ができるまで

世の中で、なければよいと思うものの一つに『税金』があります。国税・道府県税・市町村税とあり、私たちの日常生活は、税金抜きでは語れないほどです。

ところで、この税という字ですが、見てすぐわかるとおり、「禾」と「兌」とから成り立っています。漢字語源辞典（822－T 018）によると「禾」は「アワの穂がしなやかに垂れたさま」を示します。「兌(兑)」は、「兄の上にハ印を加えたもので、兄の字は頭の大きい人間の形である。ハ印は分散することを示す記号である。およそ兌とは固まったものをバラバラに分散させる、ときほぐして中の物を抜き出す意味」とあります。「税」という字は、実ったものを抜き取るという意味であり、私たちの実感に近いものがあるといえます。

そんないやな思いで納める税金を扱う人間を好ましく思う人は少ないでしょう。「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」式の恨み・つらみを一身にあびるのが税務職員といえます。

では、人はどのようにして税務職員になっていくのでしょうか。

まず公務員試験を受けることから全てが始まります。ここでは大学卒業（予定）者を対象とする「国税専門官」についてみていきましょう。（もっとも、これから書いていくことは、10年近く前の話ですので、今現在とは事情が違うかもしれませんが……）

国税専門官試験に合格しても、すぐ国税専門官になれるわけではありません。採用後すぐの3カ月間の基礎研修とそのあと3年たってから受ける約半年間の専科研修の2回の研修を経たあとで、はじめて国税専門官となります。研修制度がこれだけ充実しているのは、やはり他人様のお金にかかわる仕事だけに、それだけ高い資質が求められているからです。

最初の3カ月間の基礎研修は、千葉県の研修所（税務大学校といいますが）で行われます。全国各地からこの1カ所の研修所に集まって研修を受けるため、通勤できない人は全員寮に入ります。

多くの人にとっては、はじめての寮生活となるわけです。しかも6畳に机2つを置くだけの板の間のついた部屋は、2人部屋です。研修はこの寮と同じ敷地内にある講義棟で受けます。食堂施設・売店・風呂も厚生棟にあります。また、道路1本はさんでスーパーマーケットもあるため、行動範囲が極端に狭くなります。

ここで、大学に入って以来緩んでいたネジをしめられるわけです。大学と名がつく以上、試験あり、宿題あり、寮には門限あり（門限破りには始末書が待っている）。席には5分前に着席せよ、寮は禁酒だなどと、ちょっと予想できなかった規則も待っていました。消灯時間も決まっていますが、これは少しは大目に見てもらえていたようです。一気に受験生に逆戻りさせられたような勉強・勉強の毎日です。その間を縫って遊ばなければいけないので、とても忙しい3カ月となります。こうして一緒に研修を受けた人間は、同窓生として全国各地の税務署に配属になったあとでも仲が良いものです。そして3カ月後、税務職員の卵が全国11国税局下に散っていくのでした。　（O）

気楽に読もう――⑦

『蝦夷錦の来た道』

北海道新聞社編（北海道新聞社刊）

「北海道大百科事典」（北海道新聞社刊）によると「蝦夷錦は、中国・清時代の朝服＝官服＝またはその裂地をいう」とある。

13世紀後半以降に、中国の長江（揚子江）流域でつくられた絹織物である。黄色や紺色の地布に金糸、銀糸で竜や多様な紋様を刺繍（ししゅう）して仕上げられた華麗極まりない朝服である。

1593年（文禄2年）正月、豊臣秀吉の朝鮮侵略の前線基地であった肥前名護屋（現在佐賀県鎮西町）の城下で、徳川家康の陣屋を訪問した松前藩主・慶応は、家康に所望され、その場で着ていた胴着を献上した。これが蝦夷錦であったという。家康の目を奪ったこの蝦夷錦のルーツは、いまは消滅した〝北のシルクロード〟――サハリン（樺太）から大陸で入り、アムール川流域を南下し、中国東北地下から北京を経て南享・杭州まで、そこに住む人々の歴史と文化、暮らしを発見できる読み物である。　（U）

外国人から見た日本語 ── その1

── 日本語の挨拶表現 ──

中　川　かず子

日本語教室の初級クラス。学習者の国籍も、アメリカ、シンガポール、タイ、中国、フィリピンと多岐にわたり、文化的背景も異なっている。ここではまず、挨拶の表現から始まる。「おはようございます」と先生の発話を真似る学生たち。もちろん、お辞儀も忘れない。10分ぐらい遅れてフィリピンのＪさんが到着した。「トントン」のノックに応えて「はい、どうぞ」と先生が日本語で言うと、Ｊさんはニコニコしながら入ってきた。しかし、先生はＪさんをドアのところに戻らせ、もう一度入るところからやり直しをさせた。先生は、「すみません」と「失礼します」をここでどうしても覚えてもらいたかったのである。さて、次は人の紹介とそれに関連する挨拶だ。「こちらはワットさんです」「私はワットです。初めまして、どうぞよろしく」というお決まりの挨拶が学生同士で交される。学生たちは、表現だけでなく無意識にお辞儀まで身につけたようだ。場面は変わって、会社や友人宅を訪問する時の日本語が導入される。「すみません」から始まり、「失礼します」、「いつもお世話になっております」で一段落し、話が終わると「今後とも（これからも）よろしくお願いします」で将来的な繋（つな）がりを強調し、「そろそろ失礼します」でその場を去る予告をする。最後に、再び「失礼します」か「ご免下さい」で締めくくる。

この辺りの段階まで来ると、学生たちは、朝の教室場面でも会社や友人宅への訪問場面でも使用される日本語の挨拶の多くが〝謝り〟的表現であると感じるようになる。日本人は謝り好きの国民なのか、そうだとしたら、それは何故なのか。

日本人はよく「謝る」ことに特別の抵抗を感じない人たちだと言われる。確かに、日本人は自分の意志や感情よりも周りの人たちを思いやることを優先し、それによって円滑なコミュニケーションを求める傾向がある。嬉しさを言葉にするよりは、それを持たらした相手の努力や苦労に同情や詫びる言葉で表現するのが日本人である。贈物をもらって「有難う」よりも「すみません」が口から出たり、誰かに頼んでいた仕事が完成したと聞いて、「ご苦労様でした」、「お疲れ様でした」、「大変だったでしょう」などの相手の労をねぎらう表現をはじめ、「お忙しいのにすみません」、「悪いですね」などの詫び（謝り）の表現が使われるわけである。

日本語の挨拶の特徴を探る上でもう一つ大切なことは、日本人の、表現の形式へのこだわりであろう。我々は「ソト」のグループでの話し合いにおいては、常に相手との距離を保ちながら親しみや感謝の意を表わす。したがって、あまりよく知らない人から「よろしくね」とか「元気？」といった普通体の日本語で声をかけられると、大抵の人は予期しない相手のアプローチに戸惑ってしまう。また、外国人の日本語によく見られるが、丁寧体の日本語を使っていても、異なる発想に基づいているためにその場に相応しくない日本語になることもある。例えば、先ほどの朝の教室の例にもあったように、「失礼します」の代わりに「ハーイ、おはようございます」と楽しそうに入ってきたり、初対面の「よろしく」の代わりに「こんにちは」とか、別れ際の「よろしく」の代わりに「また会いましょう」と言ったりする。日本人は、話し手と聞き手の距離やそれぞれの領域への立ち入りに特に敏感である。特別親しい間柄は別にして、我々が社会生活を送る上では、ある程度人間関係が親密になっても形式は崩さないことと、相手の領域に無断で立ち入らない配慮が必要であろう。

（なかがわ　かずこ　人文学部教授）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.15　No.1（通巻125号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード